

で俸職した。

内田彌一は専門家をしのぐほど長唄に長じていたと伝えられる。この履歴には長唄に関する修業歴がないが、彼が明治四十一年七月に記した「長唄ニ関スル考案」の中に、次のような長唄修業の自己紹介があった。

生ハ素ト旗下ノ家ニ生レシカ、幼稚ノ頃ヨリ性来音楽ヲ好ミ、十五、六才(安政年間)ニ至テ文武修業ノ余暇ヲ以テ近隣ノ嗜好家ニ三絃ノ雜曲ヲ学フ。後チ某女師ニ就テ富本、清元ノ唱謡ヲ学フ事三、四年、然ルニ我カ嗜好に適セス。依テ爾後審カニ長唄ヲ聴取シ、始テ三絃ノ妙ハ爰ニ在ルヲ悟リ、二十一歳(文久年間)ノ春、當時有名ナル杵屋弥吉(後チ弥十郎ノ名籍ヲ継ク)ニ就キ三絃ヲ修業スル事四、五年、然ルニ聯カ感スル処アリテ憤然志ヲ転シ、其唄謡ヲ以テ世ニ鳴ラント欲シ、一日之ヲ師ニ請ヒシニ、師モ亦幸ニ之ヲ許ス。是ニ於テ爾後職務ノ余暇之カ修業ニ粉骨勉勵スル事幾数年、其ノ傍ラ歌沢ヲ学フ。其師さく、勝蔵ハ當時共ニ有名ノ者。其後チ数年ニシテ時恰モ維新ノ際ニ接ス。不幸ニシテ之ヲ中止スルノ已ムナキニ至レリ。後チ明治三、四年ノ頃、更ニ復其ノ志ヲ起シ、當時有名ナル杵屋六松、唄謡師岡安喜代八、全喜代松等ニ就キ専ラ唄謡ヲ学フ事多年。後チ又杵屋三郎助(元音楽取調掛雇員)ニ就テ愈々其技練磨シ、漸ク独吟ヲ以テ一席ニ四、五曲ヲ連唱スルノ技ヲ得ルニ至タリ。是ニ於テ数々友人ヲ介シテ貴顕紳士ニ招聘セラレ、聯カ賞讃ヲ辱ウスルヲ得タリ。然ルニ悲カナ、近年齡老テ発声意ノ如クナラス。

(蒲生郷昭氏「東京国立文化財研究所音楽舞踊研究室室長」の校訂による)

彼の翻訳書の主なものにポナブキヤン・ホント著『音楽歴史』第三章「楽術の略説」訳稿およびL・W・メーソン著『音楽捷徑』(明治十六年四月)がある。前者は音楽取調掛の音楽史の授業用テキストであった。

岡倉覺三(天心)(おかくら かくぞう)

履歴(要約)

文久二年(一八六二)十二月二十六日横浜本町一丁目の自宅に生る。幼名角藏。

明治二年(一八六九)ジョン・バラに就き英語學習を始む。

同六年(一八七三)官立東京外國語學校に入學す。

同八年(一八七五)官立東京開成學校に入學す。名を覺三と改む。

同九年(一八七六)奥原晴湖女史に就いて南画を学ぶ。

同十年(一八七七)四月東京開成學校改めて東京大學となる。文學部に入り政治學・理財學を學ぶ。

同十三年(一八八〇)七月東京大學卒業、文學士となる。十月十八日文部

省御用掛、音楽取調掛を命ぜらる。月給四十五円。〔主に外国文書の翻訳とメーソンの通訳を担当。〕

同十四年(一八八一)十一月文部省専門學務局勤務となる。音楽取調掛兼務。

同十五年(一八八二)四月文部省音楽取調掛を免ぜられ、内記課兼務となる。夏フェノロサ及びビゲローと京都・奈良地方古社寺を歴遊す。九月

九鬼文部少輔に随伴し、京畿の古社寺を巡遊す。

以後、十九年文部省国画取調掛掛員、二十三年には、東京美術学校長となつて、日本の美術界に君臨する。大正二年(一九一三)九月二日静養先の赤倉山荘で没した。同日従四位に叙し、勲五等双光旭日章を授けられた。